持続性Ca拮抗薬/HMG-CoA還元酵素阻害剤 劇薬・処方箋医薬品※

アマルエット。配合錠1番「サワイ」 アマルエット。配合錠2番「サワイ」 アマルエット。配合錠3番「サワイ」 アマルエット。配合錠4番「サワイ」

AMALUET®

アムロジピンベシル酸塩・アトルバスタチンカルシウム配合錠

貯 法:室温保存 使用期限:外箱に表示 日本標準商品分類番号

	1番	2番	
承認番号	22700AMX00846000	22700AMX00847000	
薬価収載	2015年12月	2015年12月	
販売開始	2015年12月	2015年12月	

	3番	4番	
承認番号	22700AMX00848000	22700AMX00849000	
薬価収載	2015年12月	2015年12月	
販売開始	2015年12月	2015年12月	

※注意-医師等の処方箋により使用すること

【禁忌】(次の患者には投与しないこと)

- 1)本剤の成分又はジヒドロピリジン系化合物に対し過敏症の既往歴のある患者
- 2) 肝代謝能が低下していると考えられる以下のような患者 急性肝炎、慢性肝炎の急性増悪、肝硬変、肝癌、黄疸[肝 硬変患者において、アトルバスタチンの血漿中HMG-CoA 還元酵素阻害活性体濃度が健康成人に比べて上昇した (AUCで4.4~9.8倍)他社の臨床試験成績がある。したがっ て、これらの患者ではアトルバスタチンの血漿中濃度が上 昇し、副作用の発現頻度が増加するおそれがある。また、 アトルバスタチンは主に肝臓において作用し代謝されるの で、肝障害を悪化させるおそれがある。]
- 3)妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳婦(「妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照)
- 4) グレカプレビル・ピブレンタスビルを投与中の患者(「相互 作用」の項参照)

【組成・性状】

・組成

アマルエット配合錠1番「サワイ」: 1錠中に日局アムロジピンベシル酸塩3.47mg(アムロジピンとして2.5mg)、日局アトルバスタチンカルシウム水和物5.425mg(アトルバスタチンとして5 mg)を含有する。添加物として、カルナウバロウ、クロスカルメロースNa、軽質無水ケイ酸、結晶セルロース、酸化チタン、酸化Mg、三二酸化鉄、ステアリン酸Mg、タルク、炭酸Ca、ヒドロキシプロピルセルロース、ヒプロメロース、部分アルファー化デンプン、ポリソルベート80、D-マンニトールを含有する。

アマルエット配合錠2番「サワイ」: 1 錠中に日局アムロジピンベシル酸塩3.47mg(アムロジピンとして2.5mg)、日局アトルバスタチンカルシウム水和物10.85mg(アトルバスタチンとして10mg)を含有する。添加物として、カルナウバロウ、クロスカルメロースNa、軽質無水ケイ酸、結晶セルロース、酸化チタン、酸化Mg、ステアリン酸Mg、タルク、炭酸Ca、ヒドロキシプロピルセルロース、ヒプロメロース、部分アルファー化デンプン、ポリソルベート80、D-マンニトールを含有する。

アマルエット配合錠3番「サワイ」: 1 錠中に日局アムロジピンベシル酸塩6.94mg(アムロジピンとして5mg)、日局アトルバスタチンカルシウム水和物5.425mg(アトルバスタチンとして5mg)を含有する。添加物として、カルナウバロウ、クロスカルメロースNa、軽質無水ケイ酸、結晶セルロース、酸化チタン、酸化Mg、三二酸化鉄、ステアリン酸Mg、タルク、炭酸Ca、ヒドロキシプロピルセルロース、ヒプロメロース、部分アルファー化デンプン、ポリソルベート80、D-マンニトールを含有する。

アマルエット配合錠4番「サワイ」: 1 錠中に日局アムロジピンベシル酸塩6.94mg(アムロジピンとして5 mg)、日局アトルバスタチンカルシウム水和物10.85mg(アトルバスタチンとして10mg)を含有する。添加物として、カルナウバロウ、クロスカルメロースNa、軽質無水ケイ酸、結晶セルロース、酸化チタン、酸化Mg、ステアリン酸Mg、

タルク、炭酸Ca、ヒドロキシプロピルセルロース、ヒプロメロース、 部分アルファー化デンプン、ポリソルベート80、D-マンニトールを 含有する。

・製剤の性状

表別のほれ			
品 名	剤 形	外 形 直径(mm)・重量(mg)・厚さ(mm)	性 状
アマルエット 配合錠1番 「サワイ」	フィルム コーティ ング錠	5.6 約72 2.7 [本体表示: アマルエット 1]	黄色
アマルエット 配合錠2番 「サワイ」	フィルム コーティ ング錠	(アマル) 6.6 約103 2.9 [本体表示:アマルエット 2]	白色
アマルエット 配合錠3番 「サワイ」	フィルム コーティ ング錠	(デル) 5.6 約72 2.7 [本体表示:アマルエット 3]	うすい 紅色
アマルエット 配合錠4番 「サワイ」	フィルム コーティ ング錠	ママル エット4 3.0 8.6×4.9 約103 3.0 [本体表示: アマルエット 4]	白色

【効能・効果】

本剤(アムロジピン・アトルバスタチン配合剤)は、アムロジピン 及びアトルバスタチンによる治療が適切である以下の患者に使用 する。

高血圧症又は狭心症と、高コレステロール血症又は家族性高コレステロール血症を併発している患者

なお、アムロジピンとアトルバスタチンの効能・効果は以下のと おりである。

アムロジピン

高血圧症

狭心症

アトルバスタチン

高コレステロール血症 家族性高コレステロール血症

〈効能・効果に関連する使用上の注意〉 アムロジピン

アムロジピンは効果発現が緩徐であるため、本剤は緊急な治療を要する不安定狭心症には効果が期待できない。

アトルバスタチン

- 1)適用の前に十分な検査を実施し、高コレステロール血症、 家族性高コレステロール血症であることを確認した上で本 剤の適用を考慮すること。
- 2)家族性高コレステロール血症ホモ接合体については、LDL-アフェレーシス等の非薬物療法の補助として、あるいはそ れらの治療法が実施不能な場合に本剤の適用を考慮するこ と。

【用法・用量】

本剤(アムロジピン・アトルバスタチン配合剤)は、1日1回経口 投与する。

なお、以下のアムロジピンとアトルバスタチンの用法・用量に基づき、患者毎に用量を決めること。

アムロジピン

高血圧症

通常、成人にはアムロジピンとして $2.5 \sim 5 \, \text{mg} \, \text{e} \, 1 \, \text{H} \, 1 \, \text{回経口 }$ 投与する。

なお、症状に応じ適宜増減するが、効果不十分な場合には1日 1回10mgまで増量することができる。

狭心症

通常、成人にはアムロジピンとして5mgを1日1回経口投与する。

なお、症状に応じ適宜増減する。

アトルバスタチン

高コレステロール血症

通常、成人にはアトルバスタチンとして10mgを1日1回経口投与する。

なお、年齢、症状により適宜増減するが、重症の場合は1日20 mgまで増量できる。

家族性高コレステロール血症

通常、成人にはアトルバスタチンとして10mgを1日1回経口投 与する。

なお、年齢、症状により適宜増減するが、重症の場合は 1 ± 40 mgまで増量できる。

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉

- 1) 原則として、アムロジピン及びアトルバスタチンを併用、あるいはいずれか一方を使用している場合に、本剤の使用を検討すること。なお、両有効成分のいずれか一方を服用している患者に本剤を使用する場合は、患者の状態を十分に考慮した上で、各単剤の併用よりも本剤の投与が適切であるか慎重に判断すること。
- 2) 本剤 (アムロジピン・アトルバスタチン配合剤) は次の 4 製剤がある。

アマルエット配合錠「サワイ」

1番:アムロジピン2.5mg/アトルバスタチン5mg

2番: アムロジピン2.5mg/アトルバスタチン10mg 3番: アムロジピン5mg/アトルバスタチン5mg

4番:アムロジピン5mg/アトルバスタチン10mg

上記配合用量以外の用量を投与する場合は、個別のアムロジピン製剤又はアトルバスタチン製剤を用いることができるが、それぞれの成分の用法・用量の範囲内で投与すること

【使用上の注意】

本剤は、アムロジピンとアトルバスタチンの配合剤であるため、 以下の【使用上の注意】は、各々の成分の【使用上の注意】及び、ア ムロジピン・アトルバスタチン配合剤あるいは各成分併用投与の 試験成績より記載している。

1.慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

アトロジピン

- 1) 過度に血圧の低い患者[さらに血圧が低下するおそれがある。]
- 2) 肝機能障害のある患者〔本剤は主に肝で代謝されるため、肝機能障害患者では、血中濃度半減期の延長及び血中濃度 時間曲線下面積(AUC)が増大することがある。高用量(10mg)において副作用の発現率が高まる可能性があるので、増量時には慎重に投与すること。(「副作用」の項参照)〕
- 3) 高齢者(「高齢者への投与」の項参照)
- 4) 重篤な腎機能障害のある患者[一般的に腎機能障害のある患者では、降圧に伴い腎機能が低下することがある。]

アトルバスタチン

- 1) 肝障害又はその既往歴のある患者、アルコール中毒の患者 〔アトルバスタチンは主に肝臓において作用し代謝されるの で、肝障害を悪化させるおそれがある。また、アルコール中 毒の患者は、横紋筋融解症があらわれやすいとの報告があ る。〕
- 2) 腎障害又はその既往歴のある患者〔横紋筋融解症の報告例の 多くが腎機能障害を有する患者であり、また、横紋筋融解症 に伴って急激な腎機能の悪化が認められている。〕
- 3)フィブラート系薬剤(ベザフィブラート等)、免疫抑制剤(シ クロスポリン等)、ニコチン酸製剤(ニセリトロール等)、ア ゾール系抗真菌薬(イトラコナゾール等)、エリスロマイシン を投与中の患者〔一般にHMG-CoA還元酵素阻害剤との相互 作用により横紋筋融解症があらわれやすい。(「相互作用」アト ルバスタチンの項参照)〕
- 4)糖尿病の患者[糖尿病を悪化させることがある。]
- 5)甲状腺機能低下症の患者、遺伝性の筋疾患(筋ジストロフィー等)又はその家族歴のある患者、薬剤性の筋障害の既往歴のある患者[横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。]
- 6) 高齢者(「高齢者への投与」の項参照)
- *7)重症筋無力症又はその既往歴のある患者〔重症筋無力症(眼筋型、全身型)が悪化又は再発することがある。〕(「重大な副作用 |の項参昭)

2.重要な基本的注意

本剤は、アムロジピン2.5mgあるいは5mgとアトルバスタチン5mgあるいは10mgとの配合剤であり、アムロジピンとアトルバスタチン双方の副作用が発現するおそれがあることに留意すること。(「副作用」の項参照)

アムロジピン

- 1)降圧作用に基づくめまい等があらわれることがあるので、高所作業、自動車の運転等危険を伴う機械を操作する際には注意させること。
- 2) アムロジピンは血中濃度半減期が長く投与中止後も緩徐な降 圧効果が認められるので、本剤投与中止後に他の降圧剤を使 用するときは、用量並びに投与間隔に留意するなど患者の状態を観察しながら慎重に投与すること。

アトルバスタチン

- 1)あらかじめ高コレステロール血症治療の基本である食事療法 を行い、更に運動療法や高血圧、喫煙等の虚血性心疾患のリ スクファクターの軽減等も十分考慮すること。
- 2)投与中は血中脂質値を定期的に検査し、治療に対する反応が認められない場合には投与を中止すること。
- 3) 腎機能に関する臨床検査値に異常が認められる患者に、本剤とフィブラート系薬剤を併用する場合には、治療上やむを得ないと判断される場合にのみ併用すること。急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすい。やむを得ず併用する場合には、定期的に腎機能検査等を実施し、自覚症状(筋肉痛、脱力感)の発現、CK(CPK)上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇並びに血清クレアチニン上昇等の腎機能の悪化を認めた場合は直ちに投与を中止すること。
- 4)近位筋脱力、CK(CPK)高値、炎症を伴わない筋線維の壊死、 抗HMG-CoA還元酵素(HMGCR)抗体陽性等を特徴とする免

疫介在性壊死性ミオパチーがあらわれ、投与中止後も持続する例が報告されているので、患者の状態を十分に観察すること。なお、免疫抑制剤投与により改善がみられたとの報告例がある。(「重大な副作用」の項参照)

5) 劇症肝炎等の肝炎があらわれることがあるので、悪心・嘔吐、 倦怠感等の症状があらわれた場合には本剤を中止し、医師等 に連絡するよう患者に指導すること。

投与中は投与開始又は増量時より12週までの間に1回以上、 それ以降は定期的(半年に1回等)に肝機能検査を行うこと。

3.相互作用

アトルバスタチンは、主として肝の薬物代謝酵素CYP3A4により代謝される。また、P-糖蛋白質(P-gp)、乳癌耐性蛋白(BCRP)、有機アニオントランスポーター(OATP)1B1/1B3の基質である。アムロジピンの代謝には主として薬物代謝酵素CYP3A4が関与していると考えられている。

1)**併用禁忌(併用しないこと)**

アトルバスタチン

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
グレカプレビル・ ピブレンタスビル (マヴィレット)	グレカプレビル・ピプレンタスビル(400mg・120mg)との併用により、アトルバスタチンのAUCが8.28倍、Cmaxが22.0倍に上昇したとの報告がある。本剤の血中濃度が上昇し、副作用が発現しやすくなるおそれがある。	機序:グレカプレビルのOATP1B1/1B3及びBCRP阻害、ピブレンタスビルのOATP1B1及びBCRP阻害に基づく作用によるものと考えられている。

2)併用注意(併用に注意すること) アムロジピン

	薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
	降圧作用を有する 薬剤	相互に作用を増強する おそれがある。慎重に 観察を行うなど注意し て使用すること。	相互に作用を増強するおそれがある。
*	CYP3A4阻害剤 エリスロマイシ ン ジルチアゼム リトナビル ニルマトレルビ ル・リトナビル イトラコナゾー ル	エリスロマイシン及び ジルチアゼムとの併用 により、アムロジピン の血中濃度が上昇した との報告がある。	アムロジピンの代謝 が競合的に阻害され る可能性が考えられ る。
	CYP3A4誘導剤 リファンピシン 等	アムロジピンの血中濃 度が低下するおそれが ある。	アムロジピンの代謝 が促進される可能性 が考えられる。
	グレープフルーツ ジュース	アムロジピンの降圧作 用が増強されるおそれ がある。同時服用をし ないように注意するこ と。	グレープフルーツに 含まれる成分がアム ロジピンの代謝を阻 害し、アムロジピン の血中濃度が上昇す る可能性が考えられ る。

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
タクロリムス	併用によりタクロリムスの血中濃度が上昇し、 腎障害等のタクロリムスの副作用が発現する おそれがある。併用時にはタクロリムスの血中濃度をモニターし、必要に応じてタクロリムスの用量を調整すること。	アムロジピンとタクロリムスは、主としてCYP3A4により代謝されるため、併用によりタクロリムスの代謝が阻害される可能性が考えられる。

アトルバスタチン

	7 1 721 11 12 2			
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子		
フィブラート系薬 剤 ベザフィブラー ト等	筋肉痛、脱力感、CK (CPK)上昇、血中及び 尿中ミオグロビン上昇 を特徴とし、急激な腎 機能悪化を伴う横紋筋 融解症があらわれやす いとの報告がある。	機序:フィブラート 系薬剤とHMG-CoA 還元酵素阻害剤との 副作用誘発性の相加 作用が示唆されてい る。 危険因子:腎機能に 関する臨床検査値に 異常が認められる患 者		
ニコチン酸製剤 ニセリトロール 等		機序:ニコチン酸製剤とHMG-CoA還元酵素阻害剤との副作用誘発性の相加作用が示唆されている。 危険因子:腎機能障害		
免疫抑制剤 シクロスポリン 等	1)筋肉痛、脱力感、CK (CPK)上昇、血中及 び尿中ミオグロビン 上昇を特徴とし、急 激な腎機能悪化を伴 う横紋筋融解症があ らわれやすいとの報 告がある。 2)シクロスポリンとの 併用により、アトル バスタチンのAUC0-24h が8.7倍に上昇した との報告がある。	機序:①シクロスポリンとHMG-CoA還元酵素阻害剤との副作用。②シクロスポリンによるHMG-CoA還元酵素阻害剤に対する競圧・胆汁中排泄を競合阻害がよるが、地域ではあるでは、はなり、はなるアトルバスタチンの肝への取り込み阻害に基づく相互作用が示唆されている。危険因子:腎機能障害		
アゾール系抗真菌 薬 イトラコナゾー ル等 エリスロマイシン	筋肉痛、脱力感、CK (CPK)上昇、血中及び 尿中ミオグロビン上昇 を特徴とし、急激な腎 機能悪化を伴う横紋筋 融解症があらわれやす いとの報告がある。	機序:アゾール系抗 真菌薬又はエリスロ マイシンのCYP3A に対する阻害作用が 考えられている。 危険因子:腎機能障害		
クラリスロマイシ ン	アトルバスタチンの血 漿中薬物濃度の有意な 上昇(Cmax: +55.9 %、AUCo-Tlast: +81.8 %)がみられた。	機序:クラリスロマ イシンのCYP3A4に 対する阻害作用が考 えられている。		
HIVプロテアーゼ 阻害剤 ロピナビル・リ トナビル 等	ロピナビル・リトナビ ルとの併用によりアト ルバスタチンのAUC が5.88倍に上昇すると の報告がある。	機序:これらの薬剤 によるCYP3A4の阻 害が考えられている。		

	薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
*	ニルマトレルビ ル・リトナビル	併用によりアトルバスタチンの血中濃度が上昇するおそれがある。アトルバスタチンの副作用が発現しやすくなるおそれがあるため、十分な観察を行いながら慎重に投与し、必要に応じて減量や休薬等の適切な措置を講ずること。	機序:アトルバスタ チンの代謝を競合的 に阻害するためと考 えられている。
*	エンシトレルビル フマル酸	併用によりアトルバス タチンの血中濃度が上 昇し、副作用が発現し やすくなるおそれがあ る。	機序:エンシトレルビル フマル酸の CYP3Aに対する阻 害作用が考えられている。
	グラゾプレビル	グラゾプレビル $(200mg)$ との併用によりアトルバスタチンの血漿中薬物濃度が上昇した $(Cmax: 5.66 倍、AUC0-\infty: 3.00倍)との報告がある。$	機序:グラゾプレビルによる腸管の CYP3A及びBCRPの 阻害が考えられている。
Ì	レテルモビル	レテルモビルとの併用 によりアトルバスタチン の血漿中薬物濃度が上 昇した(Cmax:2.17倍、 AUC0-∞:3.29倍)との 報告がある。	機序:レテルモビルによるCYP3A、OATP1B1/1B3及びBCRPの阻害が考えられている。
**	<u>フチバチニブ</u>	併用によりアトルバス タチンの血中濃度が上 昇し、副作用が発現し やすくなるおそれがあ る。	機序:フチバチニブ によるBCRPの阻害 が考えられている。
	グレープフルーツ ジュース	グレープフルーツ ジュース1.2L/日との 併用により、アトルバ スタチンのAUC0-72hが 約2.5倍に上昇したと の報告がある。	機序:グレープフ ルーツジュースによ るCYP3A4の阻害が 考えられている。
	エファビレンツ	アトルバスタチンの血 漿中薬物濃度が低下し た(Cmax: -12%、 AUC _{0-24h} : -43%)と の報告がある。	機序:エファビレン ツによるCYP3A4の 誘導が考えられてい る。
	リファンピシン	リファンピシン投与17 時間後にアトルバスタ チンを投与したところ アトルバスタチンの血 漿中薬物濃度が低下し た(Cmax: -40%、 AUC: -80%)との報 告がある。	機序:リファンピシ ンによるCYP3A4の 誘導が考えられてい る。
	ベキサロテン	ベキサロテンとの併用 により本剤のAUCが 約50%低下したとの報 告がある。	機序:ベキサロテン によるCYP3A4の誘 導が考えられてい る。
	陰イオン交換樹脂	アトルバスタチンの血 漿中薬物濃度が約25% 低下したが、LDL-コ レステロールの低下率 はそれぞれを単独で使 用したときより大き かった。	機序:これらの薬剤によるアトルバスタチンの吸収阻害(吸着)に基づく血漿中薬物濃度の低下が考えられている。

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ジゴキシン	定常状態において血漿 中ジゴキシン濃度が上 昇する(アトルバスタチン10mg投与でCmax: +9.9%、AUC0-24h: +3.6%、CLr:129→128 mL/min、80mg投与でCmax: +20.0%、AUC0-24h: +14.8%、CLr:160→149mL/min)ことが報告されている。 併用する場合は、血漿中薬物濃度のモニターを十分に行うこと。	機序:アトルバスタ チンによるジゴキシ ンのP-gpを介した排 出の抑制が示唆され ている。
経口避妊薬 ノルエチンドロ ン-エチニルエ ストラジオール	/ ルエチンドロン $ (Cmax: +24%$ 、 $AUC0-24h: +28%)$ 及 びエチニルエストラジオール $ (Cmax: +30%$ 、 $ AUC0-24h: +19%)$ の 血漿中濃度の上昇が認められた。	機序:アトルバスタ チンによるノルエチ ンドロン及びエチニ ルエストラジオール の初回通過効果の減 少が考えられている。

4.副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

1)重大な副作用(頻度不明)

アムロジピン

- (1)**劇症肝炎、肝機能障害、黄疸**:劇症肝炎、AST(GOT)、ALT(GPT)、 γ -GTPの上昇等を伴う肝機能障害や黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- (2)無顆粒球症、白血球減少、血小板減少:無顆粒球症、白血球減少、血小板減少があらわれることがあるので、検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- (3)**房室ブロック**:房室ブロック(初期症状:徐脈、めまい等) があらわれることがあるので、異常が認められた場合には 投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- (4)**横紋筋融解症**:横紋筋融解症があらわれることがあるので、 観察を十分に行い、筋肉痛、脱力感、CK(CPK)上昇、血 中及び尿中ミオグロビン上昇等があらわれた場合には、投 与を中止し、適切な処置を行うこと。また、横紋筋融解症 による急性腎障害の発症に注意すること。

アトルバスタチン

- (1)**横紋筋融解症、ミオパチー**:筋肉痛、脱力感、CK(CPK) 上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とする横紋筋 融解症があらわれ、急性腎障害等の重篤な腎障害があらわ れることがあるので、観察を十分に行い、このような症状 があらわれた場合には直ちに投与を中止すること。また、 ミオパチーがあらわれることがあるので、広範な筋肉痛、 筋肉圧痛や著明なCK(CPK)の上昇があらわれた場合には 投与を中止すること。
- (2)**免疫介在性壊死性ミオパチー**:免疫介在性壊死性ミオパチーがあらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- (3)**劇症肝炎、肝炎、肝機能障害、黄疸**:定期的に検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し適切な処置を行うこと。
- (4)**過敏症**:血管神経性浮腫、アナフィラキシー反応、蕁麻疹を含む過敏症状があらわれたとの報告があるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。
- (5)**無顆粒球症、汎血球減少症、血小板減少症**:無顆粒球症、 汎血球減少症、血小板減少症があらわれることがあるので、

定期的に検査を行うなど十分な観察を行い、異常が認められた場合には投与を中止し適切な処置を行うこと。

- (6)中毒性表皮壊死融解症(Toxic Epidermal Necrolysis: TEN)、皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、 多形紅斑:中毒性表皮壊死融解症、皮膚粘膜眼症候群、多 形紅斑等の水疱性発疹があらわれたとの報告があるので、 このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。
- (7)**高血糖、糖尿病**:高血糖、糖尿病があらわれることがあるので、口渇、頻尿、全身倦怠感等の症状の発現に注意するとともに、定期的に検査を行うなど十分な観察を行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。
- (8)**間質性肺炎**:間質性肺炎があらわれることがあるので、長期投与であっても、発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部X線異常等が認められた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。
- *(9)**重症筋無力症**:重症筋無力症(眼筋型、全身型)が発症又は 悪化することがあるので、観察を十分に行い、異常が認め られた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

2) その他の副作用

次のような副作用が認められた場合には、必要に応じ、減量、 投与中止等の適切な処置を行うこと。

投与中止等	投与中止等の適切な処置を行うこと。				
	頻度不明				
過敏症	瘙痒、光線過敏、発疹、多形紅斑、蕁麻疹、血管炎、 血管浮腫				
皮 膚	脱毛、帯状疱疹、発赤、皮膚変色、皮膚乾燥、皮膚 亀裂、多汗、爪の障害				
血液	好酸球增加、血小板減少、白血球減少、白血球増加、 貧血、紫斑				
肝臓	肝機能障害、Al-P上昇、ALT(GPT)上昇、AST(GOT) 上昇、γ-GTP上昇、LDH上昇、黄疸、腹水				
消化器	歯肉障害、膵炎、胃炎、胃食道逆流性疾患、胃不快感、腹部膨満、過敏性腸症候群、嘔気・嘔吐、便秘、口内炎、舌痛、舌炎、舌のしびれ、口のしびれ、口唇炎、口渇、(連用により)歯肉肥厚(油)、消化不良、アミラーゼ上昇、食欲不振、腹痛、下痢・軟便、排便回数増加、胃腸炎				
呼 吸 器	咳、呼吸困難、咽頭不快感、肺炎、鼻炎、鼻出血				
筋骨格系	筋肉痛、CK(CPK)上昇、血中ミオグロビン上昇、無力症、筋痙攣、筋緊張亢進、筋炎、関節痛、背部痛、腱炎、腱痛				
感 覚 器	視力異常、霧視、耳鳴、味覚異常				
精神神経系	頭痛、眩暈・ふらつき、片頭痛、不眠症、振戦、眠 気、気分動揺、末梢神経障害、健忘症、抑うつ、悪 夢、錐体外路症状				
内 分 泌	甲状腺腫、テストステロン低下、コリンエステラーゼ上昇、TSH上昇、ACTH上昇、アルドステロン低下、女性化乳房				
代謝異常	血清コレステロール上昇、HbAlc上昇、高血糖、糖 尿病、尿中ブドウ糖陽性、低血糖症、血清鉄低下				
循 環 器	動悸、浮腫 ^{‡②} 、ほてり(熱感、顔面潮紅等)、期外収 縮、血圧上昇、洞房又は房室ブロック、洞停止、心 房細動、頻脈、徐脈、血圧低下、失神				
腎臓・泌尿 器	BUN上昇、クレアチニン上昇、血中カリウム増加、 血中カリウム減少、頻尿・夜間頻尿、排尿困難、勃 起障害、尿管結石、尿潜血陽性、尿中蛋白陽性				
その他	脳梗塞、全身倦怠感、脱力感、疲労、しびれ、発熱、 体重増加、体重減少、疼痛、異常感覚、胸痛、着色 尿				

注1)発現した場合には投与を中止すること。

注2)アムロジピン10mgへの増量により高頻度に認められたとの報告がある。

5. 高齢者への投与

一般に高齢者では生理機能が低下しており、アムロジピン及び アトルバスタチンの血中濃度が増加することがある。

高齢者では一般に過度の降圧は好ましくないとされているので、アムロジピンは低用量(2.5mg/日)から投与を開始するなど患者の状態を観察しながら慎重に投与すること。(アムロジピンによる)

副作用が発現した場合には投与を中止するなど、適切な処置を 行うこと。〔高齢者では、横紋筋融解症があらわれやすいとの報 告がある(アトルバスタチンによる)。〕

6.妊婦、産婦、授乳婦等への投与

- 1) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には投与しないこと。 〔アムロジピンの動物実験において、妊娠末期に投与すると 妊娠期間及び分娩時間が延長することが認められている。ア トルバスタチンの動物実験において、出生児数の減少及び生 存、発育に対する影響が認められ、胎児にも生存率低下と発 育抑制が認められている。また、ラットに他のHMG-CoA還 元酵素阻害剤を大量投与した場合に胎児の骨格奇形が報告さ れている。更に、ヒトでは、他のHMG-CoA還元酵素阻害剤 で、妊娠3カ月までの間に服用したとき、胎児に先天性奇形 があらわれたとの報告がある。〕
- 2) 授乳中の婦人には投与しないこと。[アムロジピンはヒト母乳中に移行することが報告されている¹。アトルバスタチンの動物実験において、乳汁中へ移行することが報告されている。]

7.小児等への投与

低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児に対する安全性は 確立していない(使用経験が少ない)。

8. 過量投与

- 1) 症状: アムロジピンの過量投与において、過度の末梢血管拡張により、ショックを含む著しい血圧低下と反射性頻脈を起こすことがある。
- 2) **処置**: 心・呼吸機能のモニターを行い、頻回に血圧を測定する。著しい血圧低下が認められた場合は、四肢の挙上、輸液の投与等、心血管系に対する処置を行う。症状が改善しない場合は、循環血液量及び排尿量に注意しながら昇圧剤の投与を考慮する。アムロジピンは蛋白結合率が高いため、透析による除去は有効ではない。

また、アムロジピン服用直後に活性炭を投与した場合、アムロジピンのAUCは99%減少し、服用2時間後では49%減少したことから、アムロジピン過量投与時の吸収抑制処置として活性炭投与が有効であると報告されている。

9. 適用上の注意

薬剤交付時: PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。(PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている)

10. その他の注意

因果関係は明らかでないが、アムロジピンによる治療中に心筋 梗塞や不整脈(心室性頻拍を含む)がみられたとの報告がある。

【薬物動態】

生物学的同等性試験

○アマルエット配合錠1番「サワイ」

アマルエット配合錠 1 番「サワイ」は、「含量が異なる経口固形製剤の生物学的同等性試験ガイドライン (平成24年 2 月29日付 薬食審査発0229第10号)」に基づき、アマルエット配合錠 4 番「サワイ」を標準製剤としたとき、溶出挙動が等しく、生物学的に同等とみなされた。 2

○アマルエット配合錠2番「サワイ」

アマルエット配合錠2番「サワイ」は、「含量が異なる経口固形製剤の生物学的同等性試験ガイドライン(平成24年2月29日付 薬食審査発0229第10号)」及び「経口固形製剤の処方変更の生物学的同等性試験ガイドライン(平成24年2月29日付 薬食審査発0229第10号)」に基づき、アマルエット配合錠4番「サワイ」を標準製剤としたとき、溶出挙動

が等しく、生物学的に同等とみなされた。3)

○アマルエット配合錠3番「サワイ」

アマルエット配合錠3番「サワイ」は、「含量が異なる経口固形製剤の生物学的同等性試験ガイドライン(平成24年2月29日付薬食審査発0229第10号)」及び「経口固形製剤の処方変更の生物学的同等性試験ガイドライン(平成24年2月29日付薬食審査発0229第10号)」に基づき、アマルエット配合錠4番「サワイ」を標準製剤としたとき、溶出挙動が等しく、生物学的に同等とみなされた。4)

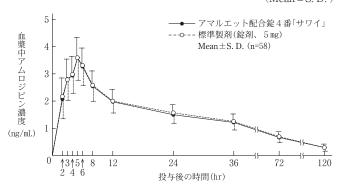
○アマルエット配合錠4番「サワイ」

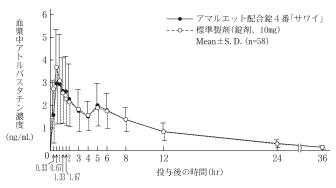
アマルエット配合錠 4番「サワイ」と標準製剤を健康成人男子にそれぞれ 1錠(アムロジピンとして 5 mg、アトルバスタチンとして 10 mg)空腹時単回経口投与(クロスオーバー法)し、アムロジピン及びアトルバスタチンの血漿中濃度を測定した。得られた薬物動態パラメータ (AUC、Cmax) について 90% 信頼区間法にて統計解析を行った結果、 $\log(0.80) \sim \log(1.25)$ の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された。5

各製剤1錠投与時の薬物動態パラメータ

		Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	T1/2 (hr)	AUC** (ng·hr/mL)
アムロ	アマルエット配合 錠4番「サワイ」	3.64 ± 0.76	4.9±0.8	40. 2 ± 6. 9	122. 6 ± 30. 5
ジピン	標準製剤 (錠剤、5 mg)	3. 68 ± 0. 79	4.8±0.9	39. 7 ± 7. 4	125. 9 ± 30. 8
アトルバ	アマルエット配合 錠4番「サワイ」	4. 74 ± 2. 54	1.6±1.2	9.6±2.2	29. 25 ± 11. 39
スタチン	標準製剤 (錠剤、10mg)	4. 88 ± 2. 28	1. 2 ± 1. 0	9. 4±1. 9	29. 38 ± 10. 38

※アムロジピン:AUC0-120hr、アトルバスタチン:AUC0-36hr (Mean±S D)





血漿中濃度ならびにAUC、Cmax等のパラメータは、被験者の選択、 体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

【薬効薬理】

- 1.アムロジピンは、ジヒドロピリジン系カルシウム拮抗薬としての作用を示すが、作用の発現が緩徐で持続的であるという特徴を有する。 ジヒドロピリジン系カルシウム拮抗薬は膜電位依存性L型カルシウムチャネルに特異的に結合し、細胞内へのカルシウムの流入を減少させることにより、冠血管や末梢血管の平滑筋を弛緩させる。⁶⁾
- 2.アトルバスタチンは、コレステロール生合成の律速酵素であるHMG-CoA還元酵素を選択的に阻害することによってコレステロールの生合成を抑制する。 n

【有効成分に関する理化学的知見】

1)一般名:アムロジピンベシル酸塩(Amlodipine Besilate)

化学名:3-Ethyl 5-methyl(4RS)-2-[(2-aminoethoxy)methyl]-4-(2-chlorophenyl)-6-methyl-1, 4-dihydropyridine-3, 5-

dicarboxylate monobenzenesulfonate

分子式: C20H25ClN2O5 · C6H6O3S

分子量: 567.05 融 点:約198℃(分解)

構造式:

性 状: アムロジピンベシル酸塩は白色~帯黄白色の結晶性の粉末 である。メタノールに溶けやすく、エタノール(99.5) にや や溶けにくく、水に溶けにくい。メタノール溶液($1 \rightarrow 100$) は旋光性を示さない。

2)一般名:アトルバスタチンカルシウム水和物 (Atorvastatin Calcium Hydrate)

化学名: Monocalcium bis \(\(\begin{aligned} (3R, 5R) - 7 - [2 - (4 - fluorophenyl) - 5 - (1 - methylethyl) - 3 - phenyl - 4 - (phenylcarbamoyl) - 1H - pyrrol - 1 - yl] - 3, 5 - dihydroxyheptanoate\(\begin{aligned} \text{trihydrate} \)

分子式: C66H68CaF2N4O10 · 3H2O

分子量: 1209.39

構造式:

性 状:アトルバスタチンカルシウム水和物は白色〜微黄白色の結晶性の粉末である。メタノールに極めて溶けやすく、ジメチルスルホキシドに溶けやすく、水又はエタノール(99.5)に極めて溶けにくい。光によって徐々に黄白色となる。

【取扱い上の注意】

・安定性試験

PTP包装(PTPシートをアルミピロー包装(乾燥剤入り))したものを用いた長期保存試験(25℃60%RH、2年間)の結果、通常の市場流通下において2年間安定であることが確認された。 81 、 91 、 101 、 11

*【包 装】

アマルエット配合錠1番「サワイ」:

PTP: 100錠(10錠×10)

アマルエット配合錠2番「サワイ」:

PTP: 100錠(10錠×10)

アマルエット配合錠3番「サワイ」:

PTP: 100錠(10錠×10)

アマルエット配合錠4番「サワイ」:

PTP: 100錠(10錠×10)

【主要文献及び文献請求先】

・主要文献

- 1) Naito, T. et al., J. Hum. Lact., 31(2), 301(2015).
- 2)~5)沢井製薬(株)社内資料[生物学的同等性試験]
- 6)第十七改正日本薬局方解説書,廣川書店,2016,C-284.
- 7) 第十七改正日本薬局方解説書,廣川書店, 2016, C-168.
- 8)~11)沢井製薬(株)社内資料[安定性試験]
- *・文献請求先〔主要文献(社内資料を含む)は下記にご請求下さい〕 沢井製薬株式会社 医薬品情報センター

〒532-0003 大阪市淀川区宮原5丁目2-30 TEL:0120-381-999 FAX:06-7708-8966

製造販売元 **沢井製薬株式会社** 大阪市淀川区宮原5丁目2-30

> ®登録商標 D10 A231110